

【原著】

教育課程の改訂は高校「国語」の学習に変化をもたらすか

—大学新入生に対する調査から—

島田康行（筑波大学），渡辺哲司（文部科学省）

高校の現行教育課程で学んだ最初の学年と、旧課程最後の学年の大学新入生を対象として、高校「国語」の学習に関する振り返り調査を実施したところ、その結果にはほとんど差がなかった。観察された範囲では、教育課程の改訂は高校「国語」の学習に今のところ変化をもたらしていない。今後、学習指導要領の趣旨が徹底、浸透していくにつれ、この状況は変わる可能性があり、継続して追跡する必要がある。

1 はじめに

島田・渡辺（2015）は、国内の大学新入生約 600 名を対象に、高校「国語」で経験した学習指導に関する振り返り調査を行った。その結果「話すこと・聞くこと」「書くこと」を学ぶ機会は「読むこと」を学ぶ機会に比して少なかったこと、また、「言語活動」を通して行われる学習の機会は少なかったこと等が示唆された。

学習指導要領の改訂にともない、高校「国語」の授業はどのように変わるのか、それを把握することは大学入試や入学後の教育の改善に有益な情報をもたらすだろう。

平成 28 年度、いよいよ現行の学習指導要領（平成 21 年告示）で学んだ者が大学に入学してきた。本研究は、教育課程の改訂が高校「国語」の学習にどのような変化をもたらすのかを捉える第一歩となることを目指す。

2 背景

2.1 現行教育課程で学んだ学年の大学入学

平成 29 年 3 月、小・中学校学習指導要領が告示となった。高校学習指導要領についても現在、改訂に向けた作業が進んでいる。教育課程部会企画特別部会の「論点整理」が指摘したように、国語科においては「教材の読み取りが指導の中心になりがちで、国語による主体的な表現等が重視されていないこと、話し合いや論述等、「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習が十分に行われていないこと」等が長く課題となってきた。今回はこの点を踏まえた改訂がなされるはずである。

一方、平成 28 年 3 月、高校を卒業し、4 月に大学に入学したのは、現行の学習指導要領（平成 21 年告示）で学んだ最初の学年である。現行の学習指導要領は、生徒の思考力、判断力、表現力等の育成を目指し

て、各科目を通じての「言語活動の充実」を最重要事項として掲げ、小～高の多くの学校現場ではその理念の実現に向けた実践が重ねられてきた。そのような現行の学習指導要領によって、話し合いや論述等「話すこと・聞くこと」「書くこと」の学習が十分に行われていないという課題は解消に向かっているのか、注目される場所である。

2.2 高大接続改革の進捗

高大接続改革をめぐる議論の中では、当初から新テスト大学入学共通テストへの記述式問題の導入の方針が示されてきた。高大接続システム改革会議の「最終報告」においても、記述式問題導入の意義が次のように述べられている。

今後重要となる複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる思考・判断の能力や、その過程を表現する能力をよりよく評価するために、記述式問題を導入することが有効である。

また、その導入が高校における指導改善につながることへの期待も示されている。

高等学校教育においても、習得・活用・探究の学習過程における言語活動等の充実が促され、生徒の能動的な学習をより重視した授業への改善が進むことが期待できる。

さらに、個別大学における入学者選抜の具体的な評価方法の例としても、「自らの考えに基づき論を立てて記述させる評価方法」等が示され、これを受ける形で、国立大学協会の「大学入学者選抜試験における記述式問題出題に関する国立大学協会としての考え方」は、「すべての国立大学受験生に、個別試験で論理的

思考力・判断力・表現力等を評価する高度な記述式試験を課すことを目指す」とした。

高大接続改革をめぐる、このような流れの中で、高校はいずれ筋道を立てて考えを述べる力の育成に重きを置くことになるだろう。それは記述式問題への対応という矮小化された形に留まるかもしれないが、そもそも「国語による主体的な表現等が重視されていない」という現状の改善に、幾分かはつながることになるはずだ。

このような高大接続改革の流れは、すでに高校「国語」の学習に何らかの影響をもたらしている可能性もある。

2.3 前回調査の概要

島田・渡辺（2015）に報告した前回調査の概要は次の通りである。

2013 年、日本各地に所在する 7 つの総合大学の新生 598 人を対象に、授業等の機会に質問紙調査を実施した。

質問紙では、高校「国語」の授業で経験した指導内容を項目 1)～23)として示し、回答者は各々の項目について「十分に学ぶ機会があった」から「ほとんど学ぶ機会がなかった」までの 5 段階で回答した。項目 1)～23)の文言は後掲（表 2）のように、高等学校学

習指導要領「国語」（平成 11 年告示）各科目（国語総合、国語表現 I、現代文）に示された「指導事項」の文言をほぼそのまま引用したものであった。

結果、「国語総合」の「読むこと」の指導事項に基づく 4 つの項目は、「話すこと・聞くこと」の指導事項に基づく 3 項目、「書くこと」の指導事項に基づく 2 項目に比して、より「学ぶ機会があった」と記憶されていることが明らかになった。

また、「国語総合」の言語活動例に基づく 6 項目は、いずれも全 23 項目中、最も「学ぶ機会がなかった」と記憶されていた。

3 方法

3.1 調査時期・場所・対象者

調査は 2014～2016 年の 3 年間継続し、それぞれ年の 3 月～11 月、授業等の機会に質問紙によって実施された。表 1 に、2013 年調査と併せて、年度ごとの実施大学と対象（回答）者の人数を示す。表中、網掛けで示した「2016（現）」が、現行の学習指導要領（現課程）で学び、大学に進学した調査対象者である（「2016（旧）」は旧課程で学んだ過年度卒生）。

なお、A～L の大学のうち、H のみが私立大学、他は国立大学である。

表 1 各調査年度の実施大学と対象者数

	2013	2014	2015	2016(旧)	2016(現)	2016(計)	計
A大学	28	24	22	5	11	16	90
B			20				20
C	72	47	47				166
D	167	128	169	20	143	163	627
E	89	130	77	16	56	72	368
F	53	51		10	36	46	150
G	87			43	129	172	259
H	93		43	7	51	58	194
I			21				21
J			139	44	96	140	279
K			91				91
L			16				16
合計	589	380	645	145	522	667	2281

3.2 質問内容

中心的な質問を表2、表3に示す。表2は2013年と2014年の調査に使用した調査票（旧調査票）、表3は2015年と2016年の調査に使用した調査票（新調査票）の内容である。

各表中、各項目の文言は表2が平成11年告示の、表3が平成21年告示の高等学校学習指導要領「国語」の各科目（国語総合、国語表現I、現代文）に示された「指導事項」の文言をほぼそのまま引用したものである。

回答者は、高校「国語」の授業で経験した指導内容について、項目1)～23)の各々に示された内容を「1十分に学ぶ機会があった」から「5ほとんど学ぶ機会がなかった」までの5段階で回答した。

3.3 分析方法

項目1)～23)に対する回答の平均（分布の重心）を調べた。

なお、一群のデータは、対象者が旧課程・現課程のどちらで学んだか、使用した調査票は新・旧のどちらであったかによって次のように分類される。

2013年：旧課程・旧調査票（前回調査）

2014年：旧課程・旧調査票

2015年：旧課程・新調査票

2016年（旧）：旧課程・新調査票

2016年（現）：現課程・新調査票

旧課程で学んだ2015年入学生に対して現課程に基づく新調査票を使用したために複雑になり過ぎたきらいもあるが、他方ではそのことによって、旧課程下の学習を現課程に基づく観点からも吟味することが可能となっている。

表2 中心的な質問（旧調査票）

高校3年間に受けた「国語」の授業では、主にどのようなことを学んだと感じますか？ 各項について「1十分に学ぶ機会があった」～「5ほとんど学ぶ機会がなかった」の5段階でお答えください。

- 1) 文章に描かれた人物、情景、心情等を表現に即して読み味わうこと
- 2) 様々な問題について自分の考えをもち、筋道を立てて意見を述べること
- 3) 文章の内容を的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること
- 4) 目的や場に応じて効果的に話したり的確に聞き取ったりすること
- 5) 文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりすること
- 6) 課題を解決したり考えを深めたりするために、相手の立場や考えを尊重して話し合うこと
- 7) 論理的な構成を工夫して、自分の考えを文章にまとめること
- 8) 様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすること
- 9) 優れた表現に接してその条件を考え、自分の表現に役立てること
- 10) 相手や目的に応じて題材を選び、効果的な表現を考えて書くこと
- 11) 論理的な文章について、論理の展開や要旨を的確にとらえること
- 12) 情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること
- 13) 目的や場に応じて、言葉づかいや文体など表現を工夫して話したり書いたりすること
- 14) 国語の表現の特色、語句や語彙の成り立ち及び言語の役割について理解を深めること
- 15) 目的や課題に応じて様々な情報を収集し活用して、進んで表現すること
- 16) 話題を選んで、スピーチや説明などを行うこと
- 17) 情報を収集し活用して、報告や発表などを行うこと
- 18) 課題について調べたり考えたりしたことを基にして、話し合いや討論などを行うこと
- 19) 題材を選んで考えをまとめ、書く順序を工夫して説明や意見などを書くこと
- 20) 本を読んでその紹介を書いたり、課題について収集した情報を整理して記録や報告などを書いたりすること
- 21) 文章に現れたものの見方や考え方などを読み取り、それらについて話し合うこと
- 22) 考えを広げるため、様々な古典や現代文の文章を読み比べること
- 23) 課題に応じて必要な情報を読み取り、まとめて発表すること

表 3 中心的な質問 (新調査票)

高校 3 年間に受けた「国語」の授業では、主にどのようなことを学んだと感じますか？ 各項について「1 十分に学ぶ機会があった」～「5 ほとんど学ぶ機会がなかった」の 5 段階でお答えください。

- 1) 根拠を明確にするなど論理の構成や展開を工夫して、自分の意見を述べること
- 2) 相手や目的に応じて題材を選び、文章の形態や文体、語句などを工夫して書くこと
- 3) 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと
- 4) 目的や場に応じて効果的に話したり的確に聞き取ったりすること
- 5) 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること
- 6) 文章の内容を的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること
- 7) 課題を解決したり考えを深めたりするために、相手の立場や考えを尊重して話し合うこと
- 8) 対象を的確に説明したり描写したりするなど、適切な表現の仕方を考えて書くこと
- 9) 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと
- 10) 話したり聞いたりしたことの内容や表現の仕方について自己評価や相互評価を行うこと
- 11) 優れた表現の条件を考えたり、書いた文章の自己評価や相互評価を行ったりすること
- 12) 文章の内容や表現の特色について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること
- 13) 幅広く本や文章を読み情報を得て用いたり、ものの見方や考え方を豊かにしたりすること
- 14) 状況に応じた話題を選んでスピーチしたり、資料に基づいて説明したりすること
- 15) 情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくったり随筆などを書いたりすること
- 16) 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること
- 17) 調査したことなどをまとめて報告や発表をしたり、内容や表現を吟味しながらそれらを聞いたりすること
- 18) 出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見などを書くこと
- 19) 様々なメディアに表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること
- 20) 反論を想定して発言したり疑問点を質問したりしながら、話し合いや討論などを行うこと
- 21) 相手や目的に応じた語句を用い、手紙や通知などを書くこと
- 22) 現代の社会生活に必要なとされる実用的な文章を読み、自分の考えをもって話し合うこと
- 23) 様々な文章を読み比べ、内容や表現について感想を述べたり批評する文章を書いたりすること

4 結果

4.1 旧課程における「国語」の学習の記憶

図 1 に 2013 年と 2014 年の結果を併せて示した。どちらも旧課程で学び旧調査票に対して回答したもので、このうち 2013 年調査は島田・渡辺 (2015) に報告したものである。

全体の傾向は安定的である。すなわち、数値の低い項目 (よく学んだと記憶されている事項) と、高い項目 (あまり学んでいないと記憶されている事項) の“顔ぶれ”に年度間で違いがない。具体的には、両年度とも項目 1) 3) 5) 8) の「読むこと」領域の項目や 11) の値が低く、項目 16)～23) の言語活動例の値は高い。

そうした中で、項目 2) 様々な問題について自分の考えをもち、筋道を立てて意見を述べること、4) 目的や場に応じて効果的に話したり的確に聞き取ったりすること、12) 情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめることの 3 項目については両年の数値間に統計的な有意差が見られた (マン・ホイットニー検定、項目 2) は $p=0.010$ 、4) は $p=0.010$ 、

12) は $p=0.000$)。2013 年よりも 2014 年の方が値は低い。項目 2) 4) は「国語総合」の「話すこと・聞くこと」、12) は「国語表現 I」の指導事項をもとにした項目である。

4.2 現課程における「国語」の学習の記憶

図 2 には、旧課程で学んだ者 (2015 年) と現課程で学んだ者 (2016 年) とが、ともに新調査票に対して回答した結果を示した。

結果を見ると、どの項目も両年度間の差がほとんどなく、きわめて安定的である。

数値の低い 3) 6) 9) 12) は、いずれも「国語総合」の「読むこと」の指導事項である。一方、値の高い 15)～23) の各項目はいずれも言語活動例として示された内容をもとにした項目である。特に、15) 詩歌をつくったり随筆などを書いたりすること、16) 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること、21) 相手や目的に応じた語句を用い、手紙や通知を書くこと、という 3 つの項目の値は高い。

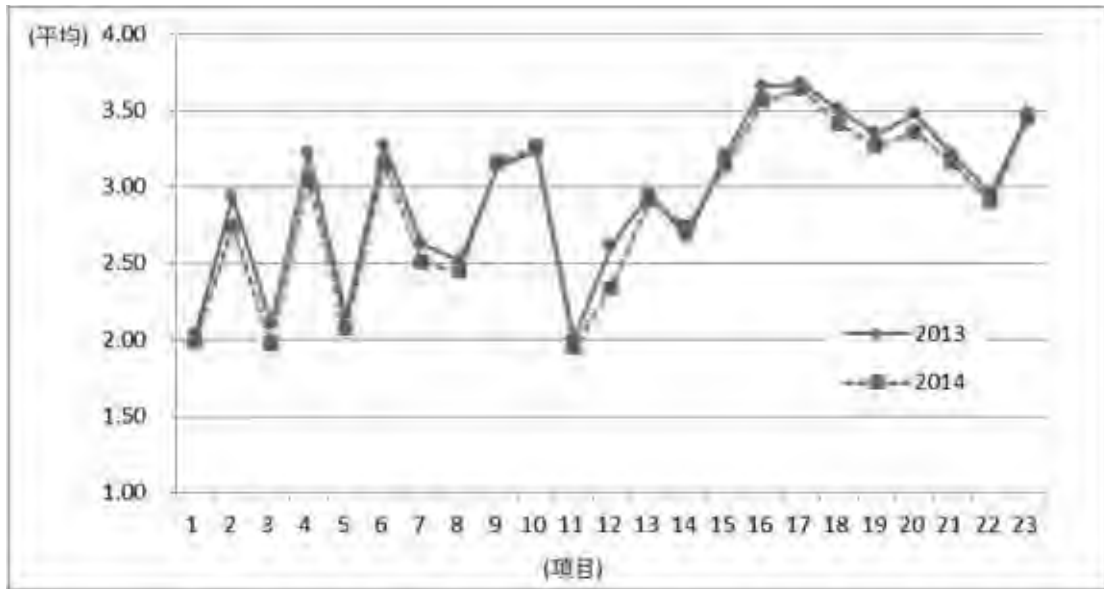


図1 旧課程年度（2013年，2014年）における各項目の平均

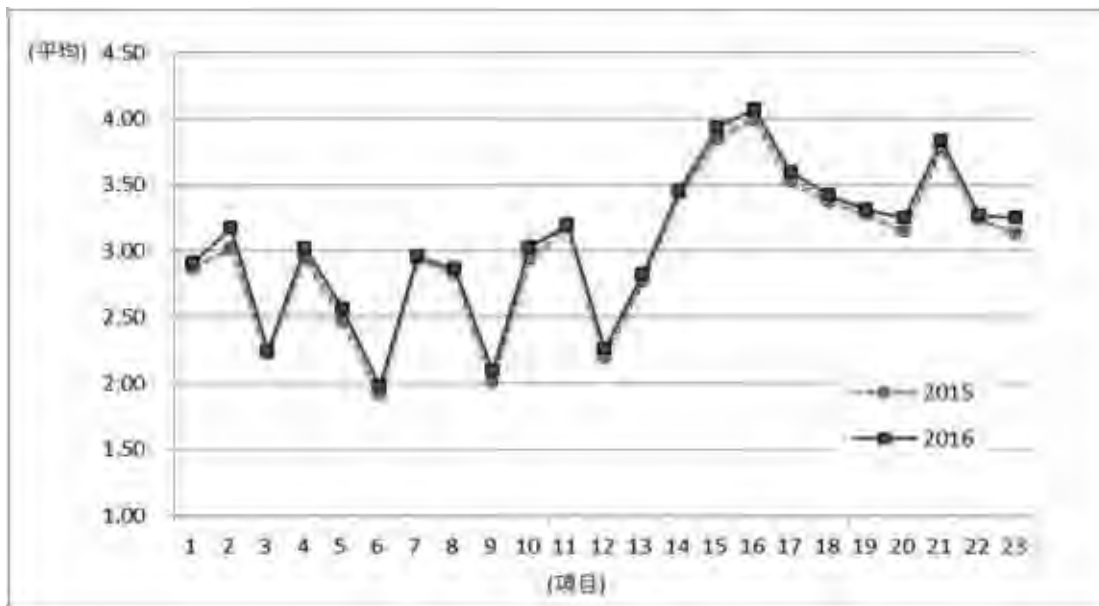


図2 旧課程（2015年）と現課程（2016年）における各項目の平均

5 考察

調査の結果からは、「読むこと」の各項目（旧調査票 1) 3) 5) 8), 新調査票 3) 6) 9) 12) 13)) については一貫して「学ぶ機会があった」と記憶されている傾向が指摘できる。

その中で比較的数値が高いのは、旧調査票 8) 様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすること、新調査票 13) 幅広く本や文

章を読み情報を得て用いたり、ものの見方や考え方を

豊かにしたりすること、の 2 項目で、いずれも幅広い読書による見方・考え方の拡張に関する内容の事項であった。この結果は、教科書教材による「読むこと」の学習が主体的な読書にあまり結びついていない可能性を示唆している。

また、相対的に「学ぶ機会がなかった」と記憶され

ている「書くこと」に関する各項目の平均を旧・新の調査票ごとに示せば、次の表 4、表 5 の通りである。

表 4 「書くこと」の項目別平均 (旧調査票)

	7)	9)	10)
2013	2.63	3.13	3.24
2014	2.51	3.16	3.26

表 5 「書くこと」の項目別平均 (新調査票)

	2)	5)	8)	11)
2015	3.02	2.48	2.82	3.18
2016	3.17	2.56	2.86	3.20

この中で比較的数字が低いのは、旧調査票 7) 論理的な構成を工夫して、自分の考えを文章にまとめること、新調査票 5) 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること、の 2 項目で、両者ともに「論理的な/論理の構成」を工夫して書くことに関する項目である。総じて「学ぶ機会がなかった」中で比較的にはあるが、「書くこと」については筋道を立てて論じることに重点をおいて指導がなされている傾向が窺える。創作的な内容を綴る言語活動の 15) 詩歌をつくったり随筆などを書いたりすること、16) 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換えたりすること、の 2 項目が最も「学ぶ機会がなかった」と記憶されていることと対照的である。

全体を通して見ると、旧課程と現課程の両方にまたがる 4 年間の調査では「国語」学習の在り方に大きな変化は見出だせない。学習が「読むこと」に偏る傾向は、旧課程生を対象として旧課程に基づく調査票を用いて調べた場合 (図 1) はもちろん、旧課程生と現課程生の両方を対象として現課程に基づく調査票を用いて調べた場合 (図 2) も同じように見て取れる。特に、旧課程の最後の学年を対象とした 2015 年調査の結果 (図 2) は、教育課程の改訂による変化の有無をみきわめるための好材料である。観察の範囲では、現段階で教育課程の改訂は高校「国語」の学習にほとんど変化をもたらしていないと言わざるを得ない。

6 おわりに

今後、学習指導要領の趣旨が徹底、浸透していくにつれて、高校「国語」のこうした状況は変わる可能性があり、さらに継続して追跡する必要がある。

また、高大接続改革が具体的に進み、大学入学者選抜において求められる資質や能力の細部が明らかにな

っていけば、そのこともまた「国語」の学習を変えていく要因の一つとなるだろう。

変えようとする兆しも見えている。2014 年の調査では、前年の調査に比べて、12) 情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめることや、「話すこと・聞くこと」に関する 2 つの項目の値が有意に下がっている。これらの項目が示すような一連の学習、すなわち、情報を収集・整理し、適切な根拠から主張を導き、構成を工夫して論じあうような学習を「学ぶ機会が多かった」と記憶する大学新入生が増えていくならば、高校「国語」の学習は変わったということになるだろう。

注

1) 高校「国語」の必修教科目「国語総合」の内容は「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」の 3 つの領域と「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」から成る。各領域には 4~5 つの「指導事項」が配されている。「指導事項」の内容は、併せて例示される「言語活動」を通して指導するものと規定されている。

参考文献・資料

- 中央教育審議会教育課程部会企画特別部会「論点整理」平成 27 (2015) 年 8 月 26 日
 <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shing/i/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/12/11/1361110.pdf> (2017 年 10 月 18 日)
- 高大接続システム改革会議「最終報告」平成 28 (2016) 年 3 月 31 日
 <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shing/i/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf> (2017 年 10 月 18 日)
- 国立大学協会「大学入学者選抜試験における記述式問題出題に関する国立大学協会としての考え方」平成 28 (2016) 年 12 月 8 日
 <<http://www.janu.jp/news/files/20161208-wnew-exam-comment.pdf>> (2017 年 10 月 18 日)
- 島田康行・渡辺哲司 (2015) 「大学新入生が高等学校で経験した「国語」の学習内容—教育課程の改訂がもたらす学習の変化を捉えるために—」『大学入試研究ジャーナル』No.25, pp.7-12
- 渡辺哲司・島田康行 (2017) 『ライティングの高大接続』ひつじ書房